

学部留学生が抱える「留学生問題」とは何か

— 信州大学経済学部留学生・日本人学生チューター・
学部教員・学部職員から見た「留学生問題」 —

川 上 尚 恵

信州大学経済学部

概要 本研究では、様々な問題を含む「留学生問題」全体に目を向け、その実相と構造を把握することを目的とし、インタビュー調査とアンケート調査を行った。調査対象者は信州大学経済学部の留学生、日本人学生チューター、教員、職員である。留学生だけでなく大学学部内で留学生と関わる人々を対象とすることで、それぞれの立場での「留学生問題」認識を多面的に示すを試みた。調査では、横田・白土（2004）のあげる留学生問題の6つの領域に関して、その問題度と具体的な問題の表れについて把握し、その要因と領域間の関係性を探った。

キーワード：留学生問題，学部留学生，インタビュー，アンケート

1. はじめに

留学生は日本人学生と比べ、大学生活において解決すべき課題が多く、大学・周囲からのサポートを必要としていると言われる。横田・白土（2004：51）は、留学生が抱える課題を「留学生問題」とし、具体的には「在日留学生の抱える問題およびニーズ」であると指摘している。その内容は時代により変化する部分もあると述べながらも、日本での留学目的と密接に関連した領域は昔から変わらないとし、その領域を以下のようにあげている。

- (1) 専門分野の教育・研究に関する領域
- (2) 語学学習に関する領域
- (3) 経済的自立と安定に関する領域
- (4) 生活環境への適応に関する領域
- (5) 青年期の発達課題に関する領域
- (6) 交流に関する領域

これらの6つの領域に関わる「留学生問題」は個別的にこれまで多数の調査や研究で取り上げられている。すべての成果に言及することは難しいが、その中で(2)の領域に関する調査や研

究では、留学生の日本語力の養成や習得に関するものが多く、日本語教育学会をはじめとする言語・言語教育関係の様々な学会、研究会を中心に実践的・実証的研究の成果が蓄積されている。さらに、留学生が学部や大学院で専門教育を受ける際の日本語力をどう養成するかという問題から、(1)の専門分野の教育研究に関する領域に関わるものもある。また、この(1)の領域の中には、(3)(4)(5)(6)の領域に関する調査や研究と同様に、留学生個人のアイデンティティ、異文化適応に関する問題や日本人との交流に関する問題なども含まれる¹。これらの領域に関しては、特に心理学系の研究が多いのも特徴的である。また、直接的に国や大学の留学生政策とも関係するため、政策科学的観点からの研究もなされている。

「留学生問題」の一側面を詳細に調査し分析することは、調査者や研究者の専門分野や日常の業務範囲とも関係しており、その知見は「留学生問題」の現状把握、解決、予防に対して重

¹横田・白土（2004：339-352）では、「留学交流研究」に関する網羅的かつ提言的なレビューがなされている。

要な示唆を与えている。しかし、留学生専門教育教員という立場において日々留学生と接していると、留学生の大学生活では、様々な問題が同時にあるいは時差を持って発生し、長期的にそれぞれが関係し影響しあっていることを実感する。また、問題の解決に向けた支援を考える時、何が問題の大きな原因となっているのか、何が優先的に解決しなければならない問題なのかの見極めが難しい場合も少なくない。以上のことから、本稿では、複雑な「留学生問題」全体に目を向け、その構造を把握することを目的とする。

さて、従来、このような調査はニーズ調査という形で行われることが多い。ニーズ調査は、教育者・機関側が留学生に対する支援や教育を行うために、留学生の「ニーズ」を知るという目的で行われる。先にあげた横田・白土の「留学生問題」の定義にもあるように、ニーズと問題には密接な関係があるが、本研究では留学生のニーズを含めた「留学生問題」に着目し、インタビュー調査とアンケート調査を行う。

両調査では、信州大学経済学部の留学生が抱える「問題」の全体像の把握を目指し、横田・白土(2004)であげられている6つの「留学生問題」の領域が留学生にとってどのように問題視されているか、またその問題にはどのような要因が関わっているのかを明らかにすることを試みる。今回は先にインタビュー調査を行うことで、「留学生問題」が具体的にどのような経験として一人一人の留学生活に表れているのかを把握したい。常日頃、留学生が自身の留学生活について多方面から語る機会はほとんどなく、筆者自身も含め留学生に関わる人々も(あるいは留学生も)それぞれの立場を反映した限られ

た「留学生像」を持っているに過ぎない。具体的なエピソードを通して、留学生の大学生活や問題を多方面から立体的に提示した上で、アンケート調査により、留学生に共通して見られる問題とその背景について明らかにしたい。

また、留学生に対する調査と同時に、学部留学生が日頃関わることの多い日本人学生チューター(以下チューター)、学部教員(以下教員)、学部職員(以下職員)²⁾の「留学生問題」認識の把握も併せて行い、留学生の抱える問題がどのように認識されているのかについても言及する。次頁の表1は信州大学経済学部2009年度の留学生の構成である。

2. インタビュー調査の概要

本調査の目的は、①「留学生問題」の6つの領域を重要度によって整理すること、②「留学生問題」を留学生の実態に即して具体的に把握することの2つである。調査概要は以下である。

【実施期間】2009年9月24日～10月23日
(各40分～60分程度)

【協力者³⁾】留学生2名
(以下、留学生A・留学生B)
チューター・教員・職員各1名

【場所】信州大学経済学部国際交流室

【方法】

日頃の留学生とのつきあい(留学生に対しては自身を含む留学生の大学生活)を通して、留学生の抱える問題について自由に意見やエピソードを述べるよう求めた。そして、インタビューの最後に、インタビュー中に出てきた問題を筆者が領域別に整理し6領域に含まれる具体的な内容を説明した上で、協力者が問題を重要度

²⁾水野・石隈(2001)は、留学生の被援助志向性についてアンケート調査を行う中で、このような留学生を取り巻く人々を「ヘルパー」として次のように位置付けている。ヘルパーは3種類に分かれ、①専門的ヘルパー(留学生センター生活部門教員・留学生専門教育教員)、②役割的ヘルパー(日本語教師・指導教員)、③ボランティアヘルパー(同国人留学生・日本人学生)となる。ちなみに、同稿では、留

学生の被援助志向性がヘルパーの種類や相談の領域によって異なっていたことが指摘されている。

³⁾調査協力者の選定は次のように行った。留学生は、性別・漢字圏非漢字圏別・学年別・奨学金受給経験の有無(学習奨励費除)の条件がそれぞれ重ならない2名、チューターは継続して活動実績がある者、教員はゼミや学部授業等で留学生の受講者を受け入れている者、職員は留学生担当経験者である。

によって順位付けした。留学生に対しては、まず「信州大学経済学部留学生全体」に関して話し、次に自身の問題を留学生全体との比較を交えて話すよう促した。

3. インタビュー結果からの考察

本章では、「留学生問題」の順位付けの結果(表2・3)をインタビュー中に言及されたエピソードと関連付け、「留学生問題」の具体的な表れを記述し考察する。

3-1. 『経済的自立と安定』

留学生(特に私費)にとって『経済的自立と安定』が重要度の高い問題であることについては、留学生に関わる人々の間では共通理解があるところである。しかし、留学生A・Bともに自分自身の問題では、『経済的自立と安定』を1位にあげていない。留学生Aの場合は、仕送りがなく基本的に自身のアルバイトで生計を立てているが、「いろいろなものを買うというのはあまり興味ない」という性格や、健康管理、貯金などをきちんと行うといった自己管理意識

表1 信州大学経済学部留学生の属性(2009年4月1日現在)

学年	1年生 10名(22.2)	2年生 10名(22.2)	3年生 15名(33.3)	4年生 10名(22.2)
性別	男性 20名(44.4)	女性 25名(55.5)		
学科	経済学科 44名(97.7)	経済システム法学科 1名(2.2)		
国籍	中国 23名(51.1)	韓国 1名(2.2)	ベトナム 6名(13.3)	ミャンマー 3名(6.6)
	マレーシア 1名(2.2)	モンゴル 9名(20)	キルギスタン 2名(4.4)	
留学経費	私費 44名(97.7)	政府派遣 1名(2.2)		

注1:休学中含 注2:()内は%

表2 留学生の「留学生問題」の順位付け

		1位	2位	3位	4位	5位	6位
留学生A	自分	専門分野の教育・研究	経済的自立と安定	語学学習	生活環境への適応	交流	青年期の発達課題
	留学生全体	経済的自立と安定	語学学習/専門分野の教育・研究	生活環境への適応	青年期の発達課題	交流	
留学生B	自分	専門分野の教育・研究	語学学習	経済的自立と安定	青年期の発達課題	交流	生活環境への適応
	留学生全体	経済的自立と安定	語学学習	専門分野の教育・研究	青年期の発達課題	交流	生活環境への適応

表3 チューター・教員・職員の「留学生問題」の順位付け

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	備考
チューター	経済的自立と安定	専門分野の教育・研究	語学学習	交流	生活環境への適応		わからない(青年期の発達課題)
教員	経済的自立と安定	交流/生活環境への適応/専門分野の教育・研究			青年期の発達課題	語学学習	
職員	経済的自立と安定	語学学習/生活環境への適応					わからない(交流/専門分野の教育・研究)問題なし(青年期の発達課題)

が高いため、それほど問題視されていなかった。一方、留学生Bは、金銭的に困った場合は友達から一時的に借り、そのあと両親に仕送りをしてもらい返済するという方法で対処していた。このような経済的なセーフティネットがあるということが、上記のような認識となっていると思われる。また、経済的な問題があるのは日本人学生も同様であり、むしろお金がない日本人学生よりは留学生の方が豊かであるという発言もあった。

ただし留学生A・B両者とも、留学生全体の問題としては、『経済的自立と安定』を1位にあげており、留学生にとって経済的な問題が最も深刻であるという認識があるといえる。

一方、チューター・教員・職員は全員が経済的問題を1位にあげているが、その根拠は異なる。教員の場合、指導留学生から奨学金申請のための推薦書を頼まれることが多いことが判断の根拠となっていた。職員の場合も同じく奨学金申請に関係するが、職員自身の職務に、奨学金応募者の募集・被推薦者への通達・書類のチェック及び提出が含まれているため、留学生と経済的な話題で会話をすることが多いということが根拠となっていた。ただし、両者とも、実際に留学生全員が経済的に困っているかどうかはわからないと述べていた。また、チューターの場合は、担当留学生がアルバイトに多忙であるということが根拠となっていた。

以上のことから、『経済的自立と安定』はどの立場からも一様に問題視されているといえる。しかし、すべての留学生が問題を抱えているわけではなく実際の状況はわからないという認識は、留学生だけではなく教員、職員にも見られた。また、実際の経済的困窮度に加え、留学生自身に自己管理能力やセーフティネットがあるかどうかも重要であろう。

3-2. 『専門分野の教育・研究』と『語学学習』

留学生A・Bが自身の問題で重要度が高いとした領域は、ともに『専門分野』であるが、こ

こではその次に問題度が高い『語学』との関連が見られた。経済学部のような社会科学分野を対象とする学部では、日本語能力の不足が専門科目の勉強に支障をきたしてくるため、この2項目は関係性が高い項目であるといえる。

留学生Bは、留学生が大学で勉強をするときに最も難しいことは日本語の勉強であると明言していたが、順位付けの際にははじめ『語学』という項目から、留学生向けの「日本語」の授業を想像し、専門の分野の理解に関わる日本語能力という側面を考慮していない様子が見受けられた。そこで、専門の授業を受けるときに日本語力が低いとわからないことも含めるとどうかと尋ねたところ、最初は4位程度だった『語学』を2位の位置に変えた。また、留学生Aは日本語専攻で母国の大学を卒業しており、入学後も日本語能力の不足が原因で困ったことはほとんどないと自負しているため、自身については『語学』を3位に位置付けている。しかし、留学生全体では、『専門分野』と『語学』を同位置の2番目に置いており、日本語がきちんと理解できていなければ専門分野の勉強はさらに難しくなると述べていた。留学生A・Bともに『語学』と『専門分野』をひとつくりにものとしてとらえているといえる。

このような認識は、チューターにも見られた。チューターは、『専門分野』と『語学』を2・3位に置いているが、この順位付けには、ある授業で穴埋め式のレジュメが配られた際、担当留学生が教員の話す言葉が聞き取れずにチューターが書いたレジュメを見せたことがあったという経験が根拠となっていた。一方、教員は『語学』を最も低く置いているが、これは担当するゼミの指導留学生を念頭においており、話す分には流暢で問題はないということであった。職員は『語学』と『適応』を同2位に置いているが、実際にはたまに不自然さを感じるものの「問題には思えない」との認識であった。

3-3. 『青年期の発達課題』

この項目については、インタビュー中におい

ては、問題として言及されるよりもむしろ日本人学生と比べた場合に自立心や社会性が高いという点で肯定的に述べられていた。例えば、職員からは事務室の窓口での対応の際、留学生の方が用件や要望をきちんと説明する傾向があることが指摘された。調査時(2009年度)の本学部留学生1年生の平均年齢は21.5歳であるが、日本人学生より年齢が高いことも、社会性の高さに関係していると思われる。しかし、『発達課題』に関わる問題がないわけではなく、留学生Bは自身についても、留学生全体についても、『発達課題』を5名の中で最も順位の高い4番目としている。留学生B自身は「悩み」と表現していたが、恋愛や卒業後の進路など、明日の生活についての小さいことから人生に関する大きなことまで、悩みは多いということであった。また、特に恋愛関係の悩みについても言及していた。しかし、これらの悩みは、自分で考え解決していくものだという認識を持っていた。また、留学生と比べて日本人学生は真面目に将来について考えることがなく、悩みは少ないと思うと述べていた。

チューターは『発達課題』に関しては「わからない」として順位付けから除外し、教員からは特に『発達課題』に関する発言はなかった。

3-4. 『交流』

『交流』は比較的低い順位におかれ、あまり問題が大きくないように見える。教員もゼミ活動の中で留学生と日本人学生は「和気あいあいとやっている」ように見え、教員自身も「浮かないように」フォローをしていると語っていた。しかし、留学生A・Bへのインタビューでは、全体を通して日本人学生との交流、留学生同士の交流、異文化間コミュニケーションに関する話題が最も多かった。

留学生A・Bは、日本人学生とは考え方の違いが大きいということを強調しており、その違いの原因として年齢の差を指摘していた。年齢だけでなく、文化的な差も少なからず関係していると思われるが、留学生にとって、日本人学

生とのつきあいの中で年齢の差が意識されていることがわかる。一方、日本人学生であるチューターには、担当留学生との年齢の差は意識されていなかった。担当以外の留学生についても、ある留学生の年齢が大分上であると知り驚いたことがあるが、特に深い話をしたことがないため、年齢差については気になっていないということであった。

年齢以外については、留学生の出身国に対する日本人の理解度の低さや、日本人の外国人に対する意識についてなど、「異文化理解」に関する指摘があった。留学生Bは、自身の出身国に関する日本人の理解度が3割ぐらいであると、すでに近代的発展を遂げ、都市部では日本と変わらないような生活をしている国であるにも関わらず、「携帯電話があるの?」「通学手段は馬?」といったような質問をされたことがあるとのことだった。

留学生Aは、留学生の持つ文化や国のことに関心を持つ日本人学生が少なく、日本人学生は国際的なことや日本の外のことに興味を持っていないと述べていた。また、日本人学生と役割分担をした際、重要な役割は留学生だからまかせないことになっているといわれたことがあるという経験から、個人の能力や仕事ぶりを見ずに「留学生だからだめだ」といわないでほしいと語った。ただし、「常識」をわきまえず、そう言われても仕方のない留学生も一部いるということも指摘していた。

一方、チューターは担当留学生とのつきあいを「普通に友達にいる」感覚であると表現しており、文化の違いや留学生という立場に関して特別な意識はなく、一個人として付き合っていると語った。留学生との話題についても、留学生の出身国やその国の文化に関したものは少ないというが、留学生からはチューターが部活でやっている書道や普段の生活で目にする日本的な文化様式に関する質問をされたことがあるとのことだった。

以上のことから、教員やチューターには「交流」に関してさして大きな問題はないという認

識があるといえるが、留学生は様々な軋轢を経験していることがわかる。その理由として、留学生は日本の文化や習慣を自分の持つそれと比較するため、違いが顕著に見えてくるが、日本人側は留学生の文化や習慣をふまえて交流することが少なく、異文化を感じる事があまりないため、一見して問題なく交流が行われているように見えるということが考えられる。留学生には日本の常識を身につけ、ふるまうことが常に求められるといえるが、留学生が常に自文化と異文化との葛藤の中で大学生活を送っているということに改めて留意する必要がある。

3-5. 『適応』

インタビュー中最も言及されることが少なかった領域が『適応』領域である。しかし、教員からは、生活環境への適応ができていないと勉強もできないため、サポートが必要だという指摘があった。また、留学生Aは、すでに日本での生活も5年ほどたつがまだ日本の社会へ十分適応できていないと感じており、具体的な説明は難しいが「もっとスムーズになりたい」と感じていた。このような認識からは、『適応』領域が、勉強などその他の領域を支える基層的領域であり、また段階性がある領域であるということがわかる。

ところで、横田・白干(2004:53)では、『適応』領域に含まれる問題は、「実際の問題」と「心理的問題」に分けられるとしている。しかし、「次の学期の授業料をどうするか」というような経済的な不安にさいなまれたり、交通事故で入院して授業が遅れることで落ち込んだりするなど、実際の問題が心理的問題を惹起する」という場合もあるという。「実際の問題」に他の領域と重なる部分もあるのであれば、「心理的問題」のみを項目として扱い、その他の項目とは別のレベルの問題として、他の領域の問題に影響を与える基層的領域だと考える方がよいのではないだろうか。

一方、大学生活における心理的不安については留学生A・Bともに触れており、特に留学生

Aは、母国を離れている分、精神的不安は日本人学生よりも大きいと問題と述べていた。

4. アンケート調査の概要

インタビュー調査から得られた示唆をもとに、信州大学経済学部留学生・チューター・教員・職員に対してアンケート調査を行った。今回の調査はそれぞれ回答数が少ないため以下では統計的手法によらず記述的に結果を報告する。

信州大学経済学部留学生を対象とした先行調査として、永井(1998)、佐藤・秋葉(2000, 2001, 2002)、信州大学経済学部留学生委員会(2002)がある。永井(1998)は、信州大学経済学部留学生を対象とした学部としては初めての調査であり、留学生の渡日前の状況、学習環境、交友関係などについて報告している。当時とは留学生を取り巻く環境が大きく変化しているため留学生の状況も異なる点が多いが、後述するように日本人との交友関係に関する問題は今なお課題として残されている。

佐藤・秋葉の一連の調査は、信州大学の全留学生(学部生・大学院生・研究生)を対象としたニーズ調査であり、その中に経済学部留学生に関する記述も含まれている。また、同時期の信州大学経済学部留学生委員会(2002)は、留学生をめぐる国の政策、各大学の受入れ状況から信州大学経済学部の留学生の大学生活まで、様々な観点から調査・分析した報告書である。

後二者による調査では、経済学部留学生にとって、「学業」「経済」「将来」が三大心配事、「住居」「経済」「学業」が三大ニーズであると指摘されている(信州大学経済学部留学生委員会2002:26)。また、日本語を話すことには問題がないが論文執筆・講義の聴解に問題がある、日本人とのつき合いが多い一方「表面的な付き合いが多い」という日本人観を持っている、といった指摘もされている(佐藤・秋葉2002:105)。

以上のような先行調査の結果も考慮しアンケート調査紙を作成した。アンケートは対象者別に4種類作成したが、質問項目は基本的に共通

している。ただし、それぞれの立場にあわせて削除・簡略化または追加した項目もある。

アンケートでは、前述の先行調査と同様な傾向を示す結果も見られた一方、制度を設けた対応が効果をあげたケースや状況がさらに深刻になったケースなど、新しい傾向も見られた。詳しくは後述するが、本稿では①「留学生問題」の領域を具体化したものを重要度によって整理し、さらにその領域に関連する質問によって背景や問題点をさぐる、②立場による「留学生問題」の認識の違いを示す、といった点からアンケート結果について報告する。以下の表4はアンケート調査の概要である。

また、留学生アンケート回答者の属性は、表5の通りである。留学生全体の構成と比較すると(表1)、学年では3年生からの回答者が少なく、国籍ではベトナム出身学生からの回答が少ないといえるが、比較的全体構成と近い比率となっている。

表4 アンケート調査概要

	対象者数	有効回答数	回答率
留学生	44	22	50%
チューター	20	10	50%
教員	34	22	64.70%
職員	6	5	83.30%

配布期間 (2009年12月1日～11日)⁴

表5 留学生アンケート回答者の属性

学年	1年 5名 (22.7)	2年 7名 (31.8)	3年 4名 (18.2)	4年 6名 (27.3)	
性別	男性 11名 (50)	女性 11名 (50)			
国籍	中国 14名 (63.6)	モンゴル 4名 (18.2)	ベトナム 1名 (4.5)	ミャンマー 2名 (9.1)	韓国 1名 (4.5)
年齢	18-20歳 2名 (9.1)	21-23歳 13名 (59)	24-26歳 3名 (13.6)	27-29歳 4名 (18.2)	

⁴配布期間後に回収した留学生6名、教員1名の回答を含む。今後記載するアンケート結果の表において、

5. アンケート結果からの考察

本章では、各アンケートの「留学生問題」の順位付けの結果を中心とし、それらの具体的内容に関連した質問への回答をまとめる。

表6・7・8・9にあげた11項目は、「留学生問題」の6領域のうち、『適応』領域を除く5領域を、インタビュー調査や先行研究を参考にして、具体的事項に置き換えた項目である。この11項目の中から、留学生の大学生活の中で問題が多いと思われるものを順位付け(3位まで)するよう求めた。

このうち表6に示した留学生アンケートの結果から、回答数が多い項目が含まれる領域について、5-1では『経済的自立と安定』領域を中心にその他の領域との関係性について、5-2では『交流』領域について、5-3では『語学』領域と『専門分野』領域について考察する。

5-1. 『経済的自立と安定』領域の問題度認識と他領域との関係性

5-1-1. 「留学生問題」の順位付けから

表6が示すように、留学生が抱える問題について、留学生アンケートの中で最も回答数が多かったのが、「成績単位留年」と「経済的」問題である。順位別でも、それぞれ1位の30.4% (『経済的』)、21.7% (『成績単位留年』) を占めており、問題度が高いことがさらに確認できる。それらに続いて問題度が高いのが、「将来の進路」「専門分野の勉強(内容・方法)」であ

特に断らない限りは、表4の有効回答数(n)を基準とし、()の数値は%とする。

表6 問題度による順位付け（留学生）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	無効
	成績単位 留年	専門分野 の勉強 (内容・方法)	日本語の 勉強 (内容・方法)	英語の 勉強 (内容・方法)	留学生 友人関係	日本人 友人関係	恋愛関係	経済的	住居	国の家族	将来の 進路	
1位	5 (21.7)	3 (13.0)	1 (4.3)	0 (0)	0 (0)	3 (13.0)	0 (0)	7 (30.4)	0 (0)	0 (0)	2 (8.7)	1 (4.3)
2位	5 (21.7)	4 (17.4)	1 (4.3)	0 (0)	0 (0)	2 (8.7)	0 (0)	4 (17.4)	0 (0)	1 (4.3)	4 (17.4)	1 (4.3)
3位	3 (13.0)	3 (13.0)	3 (13.0)	0 (0)	0 (0)	1 (4.3)	1 (4.3)	2 (8.7)	2 (8.7)	1 (4.3)	5 (21.7)	1 (4.3)
計	13(20.6)	10(15.9)	5 (7.9)	0 (0)	0 (0)	6 (9.5)	1 (1.6)	13(20.6)	2 (3.2)	2 (3.2)	11(17.5)	3
総有効回答数	63											

注1：1位～3位の（ ）内の％はそれぞれの順位における割合 注2：計の（ ）内の％はn=63に対する割合

表7 問題度による順位付け（チューター）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	無効
	成績単位 留年	専門分野 の勉強 (内容・方法)	日本語の 勉強 (内容・方法)	英語の 勉強 (内容・方法)	留学生 友人関係	日本人 友人関係	恋愛関係	経済的	住居	国の家族	将来の 進路	
1位	1 (10)	2 (20)	1 (10)	0 (0)	0 (0)	1 (10)	0 (0)	3 (30)	0 (0)	0 (0)	1 (10)	1 (10)
2位	2 (20)	1 (10)	1 (10)	0 (0)	0 (0)	1 (10)	0 (0)	3 (30)	1 (10)	0 (0)	0 (0)	1 (10)
3位	0 (0)	1 (10)	1 (10)	0 (0)	0 (0)	3 (30)	0 (0)	1 (10)	1 (10)	1 (10)	1 (10)	1 (10)
計	3 (11.1)	4 (14.8)	3 (11.1)	0 (0)	0 (0)	5 (18.5)	0 (0)	7 (25.9)	2 (7.4)	1 (3.7)	2 (7.4)	3
総有効回答数	27											

注1：1位～3位の（ ）内の％はそれぞれの順位における割合 注2：計の（ ）内の％はn=27に対する割合

表8 問題度による順位付け（教員）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	無効
	成績単位 留年	専門分野 の勉強 (内容・方法)	日本語の 勉強 (内容・方法)	英語の 勉強 (内容・方法)	留学生 友人関係	日本人 友人関係	恋愛関係	経済的	住居	国の家族	将来の 進路	
1位	7 (31.8)	2 (9.1)	1 (4.5)	0 (0)	0 (0)	1 (4.5)	0 (0)	7 (31.8)	1 (4.5)	0 (0)	1 (4.5)	2 (9.1)
2位	1 (4.5)	8 (36.4)	5 (22.7)	0 (0)	0 (0)	1 (4.5)	0 (0)	1 (4.5)	1 (4.5)	0 (0)	1 (4.5)	4 (18.2)
3位	1 (4.5)	0 (0)	1 (4.5)	1 (4.5)	2 (9.1)	2 (9.1)	0 (0)	4 (18.2)	0 (0)	1 (4.5)	5 (22.7)	6 (27.3)
計	9 (16.4)	10(18.2)	7 (12.7)	1 (1.8)	2 (3.6)	4 (7.3)	0 (0)	12(21.8)	2 (3.6)	1 (1.8)	7 (12.7)	12
総有効回答数	55											

注1：1位～3位の（ ）内の％はそれぞれの順位における割合。 注2：1位・2位n=22, 3位n=23（1名が2項目選択）
注3：計の（ ）内の％はn=55に対する割合

表9 問題度による順位付け（職員）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	無効
	成績単位 留年	専門分野 の勉強 (内容・方法)	日本語の 勉強 (内容・方法)	英語の 勉強 (内容・方法)	留学生 友人関係	日本人 友人関係	恋愛関係	経済的	住居	国の家族	将来の 進路	
1位	1 (20)	1 (20)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (40)	0 (0)	1 (20)	0 (0)	0 (0)
2位	1 (10)	1 (10)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (10)	0 (0)	0 (0)	1 (10)	1 (10)
3位	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (10)	1 (10)	1 (10)	0 (0)	1 (10)	1 (10)
計	2 (15.4)	2 (15.4)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (7.7)	4 (30.8)	1 (7.7)	1 (7.7)	2 (15.4)	2
総有効回答数	13											

注1：1位～3位の（ ）内の％はそれぞれの順位における割合 注2：計の（ ）内の％はn=13に対する割合

る。

成績や留年などの項目が学習方法や内容に関する項目以上に問題視されているということからは、実際に専門知識やスキルを獲得することよりも目に見える形での留学の成果につながる要素が求められているといえる。また、私費留学生の場合単に単位を取得するだけでなく、奨学金獲得のためによりよい成績で単位を取得することを望んでいることを考えると、『経済的自立と安定』領域との関連も強く意識されているといえよう。

また、「将来の進路」項目については、経済学部留学生は日本国内での就職を希望する者が多いため、いわゆる「就活」に乗り遅れないよう早くから進路を意識することや、学部全体でも就職活動支援を熱心に行っていることから、就職や進学という進路について意識的になりやすいことも関係していると思われる。

これらの項目は『経済的自立と安定』領域や留学の成果といった要素を軸にした関係性を持っており、留学生の大学生活の中でも重要視されているものだと考えられる。また、「成績単位留年」「経済的」「将来の進路」といった項目が問題視されているという結果は、「学業」「経済」「将来」が心配事という前述の先行調査の結果と重なるものであり、時代が変化しつつも留学生が抱える基本的な問題は変わっていないといえる。ただし、先行調査では「学業」の内容が「研究・勉強の進め方」であったのに対し、本調査では「勉強」と「成績単位留年」を分けて質問項目を設定したことにより、「勉強」よりも「成績単位留年」が「学業」問題として重視されているという結果が得られた。

一方、チューター・教員・職員アンケート(表7・8・9)で最も回答数が多かったのが「経済的」項目であり⁵、やはりインタビュー調査の結果と同様に、『経済的自立と安定』領域に対しては、留学生よりも周囲からの認識において問題度が高いといえる。

5-1-2. 『経済的自立と安定』に関連する質問項目から

では、『経済的自立と安定』に関する質問への回答を見ていこう。実際の経済的困窮度について、「あなたは大学に入ってから、経済的に困難な状況になったことがありますか」という質問をしたところ、「ある」(12名, 54.5%)、「ない」(10名, 45.5%)という結果となった。実際に困難な状況におちいった経験を持つ留学生は半数程度であった。

奨学金受給の有無もこのような回答結果と関連すると考えられるが、参考までに本学部の私費留学生の奨学金受給率(2009年度)を示すと、47.7%となっている。ただし、学習奨励費(1年間受給)を除く複数年度受給可能な奨学金の割合となると、27.7%にまで下がる。

また、「あなたは、経済的に困難な状況にならないように、どんなことをしていますか」という質問(複数回答可)に対しては、回答数が多い順に「奨学金のためよい成績がとれるよう努力している」(17名, 77.3%)、「アルバイトをしている」(15名, 68.2%)、「授業料免除や奨学金関係の情報に気をつけている」(15名, 68.2%)となった。経済的困難さを回避するためによい成績をとれるよう努力する、ということは先にも指摘した通り、『経済的自立と安定』領域が『専門分野』領域とも深く関係していることを示しているといえる。しかし、複数年度受給の奨学金の受給率の低さを考えると、その努力が必ずしも反映しているとはいえないだろう。

大学在学中の経済的な計画性を見極めた上で入学させるということは当然であるが、実際に、経済状況の悪化からアルバイトを増やし、その結果勉強に集中できず成績がのびないため奨学金応募資格の基準にすら達しないというケースはたびたびあがってくる。そのうえ、取得単位が足りず留年してしまった場合、授業料免除の対象からも外れるため、さらに状況は厳しくな

⁵教員アンケートで回答欄外に「千差万別 奨学金等 お金のある子 VS ない子」という記述があった。確

かに、経済的な困窮度には個人差が大きく表れているといえる。

表10 留学生と日本人学生との交流の難易度

	とても難しい	難しい	あまり難しく ない	まったく難し くない	わからない
留学生	3 (13.6)	14 (63.6)	5 (22.7)	0 (0)	0 (0)
チューター	0 (0)	1 (10)	6 (60)	2 (20)	1 (1)
教員	1 (4.5)	9 (40.9)	8 (36.4)	2 (9.1)	2 (9.1)
職員	0 (0)	2 (40)	1 (20)	1 (20)	1 (20)

る。

私費留学生にとって奨学金の有無は留学成果に関わる重要な要素であるが、応募できる奨学金のほとんどが民間団体奨学金であり、その数は少なく競争率も高いため大学に入学する以上の狭き門となっている。民間奨学金に頼るだけでなく、国連大学が行っているような貸与型奨学金制度の利用⁶や大学独自の奨学金制度を設立⁷するなど大学・学部の努力も求められるところであろう。

5-2. 『交流』領域の潜在的な重要性

5-2-1. 「留学生問題」の順位付けから

表6の中で前節で言及した項目の次に回答数が多かったものが、「日本人との友人関係について」である。インタビュー調査では、日本人と留学生の友人関係については留学生側からのみ言及されており、チューター・教員・職員には特に問題視されていなかった。しかし、表7、8が示すように、チューターでは18.5%、教員では7.3%が「日本人との友人関係について」問題度が高いという認識を示している。特にチューターアンケートでは、「経済的」項目に次いで問題度が高い項目となっている。

5-2-2. 『交流』に関連する質問項目から留学生への「親しい日本人学生の友人が2人

以上いますか」という質問に対しては、「いる」(10名, 45.5%)、「いない」(12名, 54.5%)という結果となった。一方、チューターへの「親しい留学生の友人が2人以上いますか」という同様な質問に対しては、「いる」(9名, 90%)、「いない」(1名, 10%)という結果であった。チューターは、自身の担当留学生だけでなく親しい留学生がいることがわかるが、それに対して留学生は日本人学生との友人関係を持っている人といない人に分かれていることがわかる。

表10は、留学生と日本人学生がつきあうことは難しいかどうかを聞いた結果である。留学生アンケートでは、「とても難しい」「難しい」をあわせると77.2%もの回答者が日本人学生とのつきあいに難しさを感じている。一方、チューターでは80%が難しくないと考えている。

これらの結果から考察すると、留学生は実際に日本人学生とある程度の友人関係がないに関わらずつきあいに難しさを感じているが、チューターはあまり感じていない。興味深いのは教員アンケートの結果であるが、実際に留学生と付き合っているチューターは難しさを感じていないにも関わらず、教員の約半数は難しさを感じている。これは、教員の認識においてはチューター以外の日本人学生を含めた回答であることや教育的立場から学生同士の人間関係を多方面から観察する機会があるということが影

⁶国連大学の貸与型奨学金制度を利用するためには、大学がその事業の「協力大学」となり、募集、選考、貸与、督促、回収を行う。さらには返済が遅滞した場合機関保証の義務を負う。各協力大学はこのような業務を負担する一方、国連大学から事務手数料を受け取る(大西2009)。

⁷日本学生支援機構(JASSO)ホームページによると、2009年8月現在、国公私立大学241校で466種の大学独自の奨学金制度が設けられている。ちなみに、信州大学全体及び信州大学経済学部で独自に設けている奨学金制度はない。

表11 考え方の違いについて

	よく感じる	感じる事が多い	感じる事が少ない	感じたことがない
留学生	5 (22.7)	10 (45.5)	6 (27.3)	1 (4.5)
チューター	1 (10)	4 (40)	5 (50)	0 (0)

表12 考え方の違いを感じる点⁸

	約束や時間	大学での勉強	友人	親	人生	お金	その他	無回答
留学生	4 (19)	5 (23.8)	13(61.9)	12(57.1)	12(57.1)	8 (38.1)	1 (4.8)	1 (4.8)
チューター	8 (80)	4 (40)	1 (10)	1 (10)	5 (50)	3 (30)	1 (10)	0 (0)

注1：（ ）内の％は回答者（留学生 n=21, チューター n=10）の選択率

表13 今後の交流について

	留学生が積極的に	日本人学生が積極的に	大学などが機会を作る	現状（親しい）維持	現状（親しくない）維持	わからない
留学生	6 (27.3)	6 (27.3)	1 (4.5)	3 (13.6)	2 (9.1)	4 (18.2)
チューター	2 (20)	4 (40)	1 (10)	3 (30)	0 (0)	0 (0)
教員	2 (9.1)	10 (45.5)	3 (13.6)	2 (9.1)	2 (9.1)	3 (13.6)
職員	1 (20)	3 (60)	0 (0)	1 (20)	0 (0)	0 (0)

響していると思われる。

留学生と日本人学生のつきあいについて、両者の考え方の違いに関する質問を見ていこう。表11は「留学生／日本人学生との考え方の違いを感じるがありますか」という質問に対する結果である。

日本人学生に対して考え方の違いを感じている留学生の割合は、「よく感じる」「感じる事が多い」をあわせて68.2%を占める。チューターの場合、留学生との考え方の違いを「よく感じる」「感じる事が多い」50%、「感じる事が少ない」50%と分かれた。

また、少しでも違いを感じると回答した人に、どのようなことに考え方の違いがあるかを聞いたところ（複数回答可）、表12のような結果となった。留学生の回答の中で最も多かったのが

「友人に対する考え方」、続いて「親に対する考え方」と「人生についての考え方」であった。ここでは、自由回答を除いた6つの選択肢全てを選択した者がいるなど、1名あたりの回答数が多く、留学生が様々な面で、日本人学生との考え方の違いを実感していることが浮き彫りとなった。

一方、チューターでは、「約束や時間に対する考え方」、「人生についての考え方」、「大学での勉強に対する考え方」であった。時間や約束の概念は文化によって異なるが、実際に留学生とチューターの時間概念の違いが、チューター活動上問題になることは多い。

また、現在の留学生と日本人学生の友人関係をふまえ、今後どうした方がよいかと質問した結果が表13である。

留学生アンケートの中で回答数が多いのは、「親しくつきあいたいので、自分から努力した

⁸「その他」を選択した際の自由記述は留学生・チューターとも「価値観」であった。

表14 留学生の日本人観（留学生アンケート）

	選択肢	選択数(%)
1	異文化を良く理解している	1 (4.5)
2	私の国に興味を持っている	7 (31.8)
3	私を仲間として受け入れてくれる	2 (9.1)
4	留学生に対する差別がある	7 (31.8)
5	留学生の出身国によって態度が変わる	10 (45.5)
6	留学生の交流に消極的だ	11 (50)
7	表面的な付き合いが多く、なかなか友達になれない	19 (86.4)
	無回答	1 (4.5)

い」「親しくつきあいたいので、日本人学生に積極的になってほしい」である。自分自身で努力するという姿勢の留学生が多い一方、日本人学生にも積極性を求めている。また、「わからない」の回答が比較的多いということから、日本人学生とのつき合いに対して具体的なイメージを持ってない留学生も少なくないと考えられる。

一方、チューターアンケートでは、「親しくつきあいたいので、自分から努力したい」が最も多いのは同じだが、次に続くのが「現在親しいつきあいをしているので、今のままでよい」、「親しくつきあいたいので、留学生に積極的になってほしい」である。チューターは留学生とのつきあいについて基本的には「親しくなりたい」という意向を持ち、現在のつきあいで満足している割合も高い。

教員・職員の認識は両者の関係を外から見ているものだといえるが、どちらも交流促進の意向を持った上で「日本人学生に積極的になってほしい」と考えていることがわかる。

5-2-3. 留学生の日本人観と日本人の留学生観

佐藤・秋葉(2002)では、留学生の日本人観に関する質問を設けており、大学全体の留学生の回答では日本人に対する肯定的印象と否定的印象の合計が近接しているながらも、「表面的な付き合いが多く親友になれない」というステレ

オタイプ的な項目の選択数が最も多いことに着目している。特に経済学部留学生はこの項目の回答数が多いという。今回の調査では、留学生問題の『交流』領域の背景を探るため、佐藤・秋葉(2002)の質問と同様の質問をした(複数回答可)⁹。表14はその結果である。

回答としては、「表面的な付き合いが多く、なかなか友達になれない」が86.4%と最も多く、佐藤・秋葉(2002)と同様の傾向が示された。しかし、今回のアンケートでは肯定的印象(1~3)と否定的印象(4~6)の合計には約3倍のひらきがあり、否定的印象が強く表れた結果となった。調査対象が異なるため厳密な比較はできないが、留学生の日本人に対する否定的印象はやはり強いといえる。

さて、今回はチューター・教員・職員に対しても留学生観に関する質問を行った。「日本人・日本社会に対する留学生の態度・行動についてどう思いますか。」という質問に対して、回答を求めた(複数回答可)。表15はその結果である。

教員・職員アンケートにおいて最も回答数が多かったのが、「留学生同士で固まっている」(教:15名, 68.2%)(職:5名, 100%)である。「固まる」という否定的な意味合いも含まれるが、留学生の中でも特に同国人同士が集

⁹ただし、表現や語句を一部変えてある。

表15 チューター・職員・教員の留学生観

	チューター	教員	職員
日本人・日本社会をよく理解している	6 (60)	4 (18.2)	2 (40)
日本の習慣になじもうとしている	5 (50)	11 (50)	0 (0)
日本人との交流に積極的である	7 (70)	2 (9.1)	1 (10)
留学生同士で固まっている	5 (50)	15 (68.2)	5 (100)
日本人・日本社会に対して否定的である	0 (0)	1 (4.5)	0 (0)
自国の習慣にそって行動している	1 (10)	1 (4.5)	0 (0)

注1：()内の％は回答者(チューターn=10, 教員n=22, 職員n=5)の選択率

まって行動する様子がよく見られるということがその判断の根拠となっているのだろう。留学生同士のネットワークは、留学生生活を支える最も重要なツールである。しかし、留学生同士の助けあいが排他的なイメージを与えることがあることには留意する必要がある¹⁰。

チューターアンケートでも「留学生同士で固まっている」が50%を占めているが、それ以上に多かった回答が、「日本人との交流に積極的である」(7名, 70%), 「日本人・日本社会をよく理解している」(6名, 60%)であり、「日本の習慣になじもうとしている」(5名, 50%)も比較的多く、肯定的印象がほとんどである。チューター・教員・職員アンケートのいずれにおいても、回答されているほとんどが肯定的項目であり、留学生は比較的好意的なイメージを持たれているといえる¹¹。

以上の『交流』領域は、火急の問題度はそれほど高くないが、『交流』に関する問題を解決することは、留学生生活を豊かにすることにつながると思われる。また、『交流』を通して培った人間関係が、その他の領域に関する問題解決を助けてくれるサポーターとして機能することを考えると、『交流』領域の潜在的重要度は高いと考えられる。

一方、『交流』領域の問題は永井(1998)で

も指摘されており、留学生の抱える課題として長年認識されていながら解決が難しい領域であるといえる。永井(1998)の調査では、「日本人の友人はできやすいかどうか」という質問に対して、63%が「できにくい」と回答し、その理由として、外国人に対する日本人の偏見、日本人の間接的表現、日本人の集団行動、日本の習慣が順にあげられているという。

5-3. 『語学』領域と『専門分野』領域

表6から9の問題度の順位づけの中で、『語学』領域に含まれる項目は、「日本語の勉強」と「英語の勉強」であるが、「英語の勉強」に関してはほとんど回答されておらず、語学に関してはやはり日本語の問題が大きいといえる。

さて、留学生アンケートでは日本語力に関して13項目についてその問題度を聞いた。項目を大きく分けると、日常的な日本語使用(日常会話・事務会話・書類書き・友人へのメール・先生へのメール)と専門科目の講義における日本語使用(講義を聞く・テストを受ける・レポートを書く)とゼミにおける日本語使用(ゼミで聞く・ゼミで発表する・ゼミで議論する・卒論を書く)の3つ、それに加えて後者の2つの使用場面に関係する「専門書を読む」となる。

日常的な日本語使用場面の日常会話・事務会

¹⁰ある留学生は、何人かで話をしている際、話の輪の中に1人でも留学生の母語を理解しない人がいる場合、同国出身留学生同士の会話でも、必ず日本語を使うようにしているというが、このような留学生側の

配慮も必要となってくるだろう。

¹¹教員アンケートでは、回答欄外に個人差があるとの記述が3件あり、同項目では留学生の個人差が大きいという指摘がされた。

表16 日本語に関する問題度（留学生アンケート）

		問題あり	少し問題あり	問題なし	該当しない	無回答
①	日常会話	0 (0)	2 (9.1)	19 (86.4)	1 (4.5)	0 (0)
②	事務会話	0 (0)	3 (13.6)	18 (81.8)	1 (4.5)	0 (0)
③	事務書類	0 (0)	3 (13.6)	19 (86.4)	0 (0)	0 (0)
④	友人メール	0 (0)	1 (4.5)	19 (86.4)	1 (4.5)	1 (4.5)
⑤	先生メール	1 (4.5)	8 (36.4)	13 (59.1)	0 (0)	0 (0)
⑥	専門聞く	2 (9.1)	10 (45.5)	10 (45.5)	0 (0)	0 (0)
⑦	専門テスト	2 (9.1)	14 (63.6)	6 (27.3)	0 (0)	0 (0)
⑧	専門レポート	1 (4.5)	13 (59.1)	8 (36.4)	0 (0)	0 (0)
⑨	ゼミ聞く	1 (4.5)	6 (27.3)	15 (68.2)	0 (0)	0 (0)
⑩	ゼミ発表	3 (13.6)	10 (45.5)	8 (36.4)	1 (4.5)	0 (0)
⑪	ゼミ議論	3 (13.6)	15 (68.2)	3 (13.6)	1 (4.5)	0 (0)
⑫	卒論書く	6 (27.3)	5 (22.7)	1 (4.5)	7 (31.8)	3 (13.6)
⑬	専門読む	1 (4.5)	10 (45.5)	10 (45.5)	0 (0)	1 (4.5)

話・書類書きでは、「問題あり」の回答数は0、「問題なし」とした回答もそれぞれ80%を超えており、問題はないとする認識が高いことがわかる。ただし、メールの項目では、友人に対する場合、「問題なし」とする回答が86.4%（19名）を占めるのに対し、教師に対する場合は「問題なし」が59.1%（13名）と減少する。

一方、専門科目の講義とゼミにおける日本語使用場面では、「問題なし」の選択数が多いのが聴講であり、講義では45.5%（10名）、ゼミでは68.2%（15名）となった。比較的問題があると考えられているのは、卒論・議論・テストなどでの日本語使用であるといえる。以上のような日本語力に関する質問に対する回答結果から、日本語力に関する問題は、日常的な日本語使用場面より専門科目の学習に関する場面に表れるといえる。

この留学生の日本語力¹²については、チューター、職員アンケートでも同様の傾向を示して

¹²日本語力に関して、チューター・職員アンケートでは留学生・教員アンケートよりも学習面の項目は少ない。

おり、日常生活から学習面を通して「問題あり」という回答は少なかった。一方、教員アンケートでは「問題がある」との回答が多かった順に、「授業でテストを受ける」（11名、50%）、「授業でレポートを書く」（8名、36.4%）、「授業を聞いて理解する」（6名、27.3%）という結果となった。

留学生アンケート、教員アンケートの双方で問題度が比較的高く表れているテスト場面については、留学生からの授業担当教員に対する要望にも表れている。留学生アンケートで授業に関して教員に対する要望が「ある」と回答した12名（54.5%）に、その要望について自由記述で回答を求めた。そのうち、テストに関して、「専門科目の授業は、わかりやすいのだが、テストのときにわけわからない問が出るときがある。」「試験問題は分かりやすい言葉を使う」といった記述があった。

その他の回答は、主に板書や詳しい説明を求めるものであるが、授業中などでのこのような困難は、授業後に教員に質問する、あるいは教科書を読み返すなどといった方法である程度理

解を補うことができる。しかし、理解不足ではなく難解な言葉や言い回しがわからない場合、テスト中にそのような方策を取ることは難しい。

一方、教員アンケートで「学習面において、留学生に対して何か特別にしていることや心がけていることがありますか。」という質問をしたところ、9名(40.9%)が「ある」と回答し、次のような自由記述による7つの回答があった。

- ・留学生から進度やレジュメについて要望があり、配慮するようにしている。ゼミに留学生が多いので、専門以外でも、用語や制度等も解説したりする。
- ・(留学生だけではないが)ミニ・レポートの提出など各人とのキャッチ・ボールの機会を設けたり、講義内容がわかりづらい場合は板書を多く取り入れるようにしている。
- ・提出されたレポートの日本語に関する間違いを、出来る限り添削しています。
- ・留学生と判明したばあい、質問にわかりやすく応答するよう心がけます。
- ・留学生だけではなく、毎回、理解度チェックのため、学習した内容を数行にまとめて提出させています(講義最後の10分間で)。その内容を毎回チェックし、必要に応じてコメントを付しています。
- ・○1対1のときは、ゆっくりと喋る ○留学生同士の会話では、必ず日本語で行うよう指導
- ・留学生と日本人ゼミ生の学習面での交流を促し、発表、レポート作成ゼミ以外でのノート交換など留意した。

留学生に限らず、日本人学生を含んだ配慮も多いが、留学生に対しては基本的にゆっくりとわかりやすい日本語を使って説明するということが行われている。また、「留学生と日本人ゼミ生の学習面での交流」を促しているという記述もある。

6. おわりに

学部留学生の抱える問題に対する留学生、チューター、教員、職員の認識について以上のように考察してきた。調査で明らかになった個々の問題を「留学生問題」の領域全体から考えてみると、次のような特徴と関連性を持っていると思われる。

①『経済的自立と安定』に関する問題は、実際の経済的問題として表れる場合もあるが、他の領域の個々の問題に対する影響度が高く、留学生・日本人共に留学生活の中で最も重要な課題だと認識している。

②『交流』領域の問題度は高くないが、留学生側に日本人学生との交流が難しいという考えが広くあることから、「交流」を回避することで問題化していない可能性があると思われる。また、留学生からは「交流」に関する問題は重視されているが、それに比較して日本人側からの問題度認識は比較的低い。

③『専門分野』領域では、実際の専門分野の学習に関わる問題以上に、単位取得や留年に対する問題が重視されている。

④『語学』領域では、『専門分野』領域に関わる場面での日本語に関して問題度が高い。また、日本語力の不足を補うことが難しいテスト場面での問題度は高い。

⑤『適応』領域は、特に問題として意識されることはあまりないが、他の領域の基盤となり、留学生生活を支える基層の問題である。また、この『適応』には段階性がある。

一方、先行調査と比較して本アンケート調査で明らかになったことは次の3点である。①「学業」「経済」「将来」という問題は変わらずあるものの、「学業」の中では「勉強」よりも「成績単位留年」が問題視されている、②日本人に対する否定的印象が強まっている可能性がある、③「住居」問題が表れていない。

③の「住居」問題は、先行調査では三大ニーズの一つと指摘されながら、今回の調査では問

題としてほとんど表れていなかった。留学生の住居問題といえば、保証人問題、住居探し（敷金・礼金の有無、低額の家賃、外国人受入れの可否）などがあるが、現在、信州大学では保証人が見つからない留学生に対して、長野県国際交流推進協会（ANPIE）の留学生アパート賃貸借契約保証制度の利用を勧めている。また、保証人がいる場合にも、留学生住宅総合保証制度を利用して保証人の負担を軽くすることが可能である。住居探しについては、何人かの同学部留学生が同じアパートに住んでいたり、先輩が退去した後に後輩が入居していたりしているなど、留学生同士の間で住居に関する情報共有が進んでおり、条件のよいアパートが口コミで伝わっているという現状がある。以上のように「住居」問題は、制度的対応や留学生のネットワークによる情報の共有が問題の改善に役立ったケースとして挙げられよう。

一方、②の日本人に対する否定的印象については、今回の調査全体を通して、特に顕著に表れた結果である。留学生の『交流』領域に関する課題は、前述のように長年指摘されながらも解決が難しいものである。

筆者が観察する限りでも、入学したばかりの頃には多くの日本人の友人を作りたいと希望を持っていた留学生でも、次第に日本人とのコミュニケーションにとまどいを持つようになる姿が見られる。このようなとまどいは、「一度話して親しくなったと思ったのにすれ違っても挨拶してくれない」「一対一では仲良く話せるのに、日本人同士の輪の中に入っていけない」「飲み会のどこが楽しいのかわからない」「個人的にはいくら親しくなっても出身国についてステレオタイプ的なイメージしか持たれておらず、知ろうともしない」など様々である。

しかし、一方の日本人側からも留学生に対する様々な意見を聞く。「物を貸したら壊された」「メールに返信しない」「ドタキャンが多い」「いつも問題ばかり起こす」「便宜を図ってもらおうとする姿勢が見える」などである。コミュニケーションスタイルや価値観の違いによる誤

解や齟齬は、留学生側・日本人側双方に存在するといえ、両者に対して異文化トレーニングや異文化理解を促進する機会を設けることも必要であろう。

留学生支援という点、大学や日本人側は支援を行う立場、留学生はそれを受ける立場といった図式が思い浮かびがちである。しかし、留学生の受入れを学部あるいは大学全体での国際化の一つとして位置付けた場合、今までのような支援体制を進めると同時に留学生の持つ背景を活かし、大学内の国際化・多文化化に役立てるという視点も必要だと考える。その場合は、大学あるいは日本人側にも「変革」の意識が求められるのは当然であろう。また、留学生30万人計画のような留学生の「量」的拡大が今後必至となる中、「質」を確保すると同時に、留学生の存在を活かした受入れを戦略的に講じることも必要であろう。

最後に今後の課題について述べておくと、各領域の個々の問題設定は、インタビューで出てきた話題や先行研究で指摘されることの多い項目に限ったため、本稿で扱っていない問題も多くある。また、本稿では、奨学金の有無や国籍による違いなど留学生の属性を考慮した考察を行っていない。さらに、日本人学生側の認識をチューターに限って示したが、チューターが立场上異文化交流に何らかの積極性を持っていることを考えると、チューターの認識のみをもって一般の日本人学生との認識であるとはいえないだろう。今後さらに留学生問題の実証的研究を積み上げ、考察していく必要がある。

また、アンケート調査においては、選択肢の設定の不十分さや留学生・日本人の多様性を指摘する回答が見られたように、個人差や多様性への配慮がなされていないという限界があることは否めない。今回の調査が一定の意義を持つことは認めつつも、個人差が反映された調査方法やより適切な調査紙作成については今後の課題としたい¹³。本稿で扱った「留学生問題」が留学生のニーズと深く関係していることを考慮し、今回の調査で明らかになった個々の問題に

対しては、今後具体的支援策をそれぞれ進めていきたい。

謝辞

本調査にご協力いただいた信州大学経済学部留学生・チューター・教員・職員の皆様に対して、深く感謝申し上げます。

また、信州大学経済学部金早雪教授からは本稿執筆にあたりご助言を、信州大学国際交流センター佐藤友則准教授からはアンケート調査に関してご教示をいただきました。重ねて感謝申し上げます。

引用文献

- (1) 大西好宣 (2009) 「貸与型奨学金を留学生の生活支援に—国際連合大学・私費留学生育英資金貸与事業 (UNU-FAP) の六年—」『留学交流』vol.21 no.9 p10-13
- (2) 岸田由美 (2004) 「理系大学院留学生の生活とニーズに関する事例研究—金沢大学留学生生活実態調査の分析より—」『金沢大学留学生センター紀要』第7号 p45-58
- (3) 佐藤友則・秋庭裕子 (2000) 「信州大学の留学生のニーズ調査—1999年10・11月調査において—」『信州大学留学生センター紀要』第1号 p75-85
- (4) 佐藤友則・秋庭裕子 (2001) 「第2回信州大学の留学生のニーズ調査—2000年11・12月調査において—」『信州大学留学生センター紀要』第2号 p91-102
- (5) 佐藤友則・秋庭裕子 (2002) 「第3回信州大学の留学生のニーズ調査—2001年11・12月調査において—」『信州大学留学生センター紀要』第3号 p95-109
- (6) 信州大学経済学部留学生委員会 (2002) 『留学生入学選抜方法と教育方法の改善に関する調査研究報告書 (2002年3月)』
- (7) 独立行政法人日本学生支援機構 (JASSO) ホームページ <http://www.jasso.go.jp/study-j/documents/shougakukindaigaku.pdf> (2010年6月10日閲覧)
- (8) 永井友香 (1998) 「留学評価における学習環境と交友関係に関する一考察—「信州大学経済学部外国人留学生の生活と意識に関する調査」より—」『信州大学経済学論集』第39号 p43-52
- (9) 水野治久・石隈利紀 (2001) 「アジア系留学生の専門的ヘルパー、役割的ヘルパー、ボランティアヘルパーに対する被援助志向性と社会・心理学的変数の関連」『教育心理学研究』49(2) p137-145
- (10) 横田雅弘・白土悟 (2004) 『留学生アドバイジング 学習・生活・心理をいかに支援するか』ナカニシヤ出版

(受付日 2010年11月10日)

(受理日 2010年12月7日)

¹³岸田 (2004: 46) は、留学生の実態調査を行った上で「実際にはより多様で交差的な留学生に、極度に単純化したイメージを与えかねないことを危惧するが、実態調査の結果を踏まえることで、過去の個人的経験やメディアに流布するイメージ等からくるス

テレオ・タイプを排除し、一定の客観的な認識を提供するという意義はなおあるのではないかと考える。実際に彼/彼女等に接する教職員、日本人学生に対して、一定の基礎的な知見を提供することはできるだろう。」と述べている。